

# 大東つれづれ帳

(5)

## 野鳥に親しむ

野鳥愛好者を大きく分ければ、ウォッチング派とリスニング派とになります。前者は、双眼鏡や望遠鏡を手にして、少しでも大きく少しでも鮮明に野鳥の姿を見ることが全力を注ぎます。場所は、干潟や田んぼといった見通しのきく所を好む傾向があります。

一方、後者は、樹林帯を歩きながら鳥の鳴き声を楽しみ道具も双眼鏡だけのことが多いようです。五月の飯盛山はといえば新緑が空を隠し、ウォッチング派には少々不便であります。それにこの時期は、鳥の繁殖期に当り、さえずりの美しい声を聞かせてくれる季節です。という訳で五月の飯盛山はリスニング派向きなのです。

先日飯盛山を歩く機会があり、鳥たちの声を楽しむ

は、さえずりと地鳴きの二通りあります。さえずりはテリトリ宣言の歌で主に繁殖期のもので、例えばウグイスではホーホケキョという鳴き声に当たります。地鳴きは普段一般の場で、冬場は大抵地鳴きばかりです。ウグイスではチャッチャツという声があります。さえずりと地鳴きは随分と違うもので、一体これが同じ鳥かと思えるぐらいです。春の田んぼで見かけられるヒバリは延々とさえずります。よく息が続くものだと感心していたところ、実は鳥は呼吸と吸気の両方で鳴いているということを知り、なるほどと思つたことがあります。

ども姿を見るのは容易ではありません。木の中を飛び回るため、すぐ近くで声があってもなかなか見つけれないのです。彼らに比べホオジロは見つけ易い鳥です。木のてっぺんで一筆啓上仕り候とさえずります。一年中見られ冬場はチテツと二声続けて鳴くだけです。野崎観音へ下る途中の池で、ツイーという声がし、一瞬青いものが横切りました。カワセミです。この鳥はがけに横穴を作つて巢を作るので、川の土手がコンクリートに変わつてしまつた今、随分と少なくなつてしまいました。山を下りて振り返ると、ニセアカシアの花盛りで、山の一部がすっかり白くなつていました。鳥たちの歌声よ永遠なれ。

文・天野史郎



木のてっぺんでさえずるホオジロ